

アムハラ語*√ngr 動詞の意味と用法の記述研究

岩月真也 (名古屋大学大学院)

要旨

エチオピアの連邦政府の作業語であるアムハラ語は、他のアフリカ諸語と比較して、記述は進んでいるほうである。しかしながらそれらの多くは過去の研究であり、最新の言語状況を記述したものは非常に少ない。本稿では動詞*√ngr に焦点を当て、その意味と用法の記述を試みる。その結果、動詞の取りうる項のさまざまな制限や、過去の研究で指摘されていない新しい用法を記述することが出来た。殊に、tā-nāggārā に「強い命令」「叱る、咎める」といった意味が記述できたことは本研究の大きな成果と言える。

1. はじめに

東アフリカに位置するエチオピア連邦民主共和国（以下エチオピア）は他のアフリカ諸国の例に漏れず多民族・多言語国家である。Ethnologue は、1994年の国勢調査の結果として85の言語を挙げている。系統も様々で、アフロ・アジア語族のセム諸語（アムハラ語、ティグリーニャ語など主に北部）、クシ諸語（南部のオロモ語、東部のソマリ語など）、オモ諸語（南西部オモ川流域、ウォライタ語など）、ナイロ・サハラ語族（グムズ語やヌエル語など、主に西部のスーダン国境沿い）が話されている。本発表で扱うアムハラ語はアフロ・アジア語族セム語派に属する言語である。話者数はエチオピア国内に少なくとも2000万人と推計されており、同国における最有力言語である（岩月2012:43）。連邦政府の憲法もアムハラ語で書かれており、同憲法においてアムハラ語は連邦政府の「作業語¹」と位置付けられている。国内での通用度は比較的高く、国内非アムハラ語圏においても市場などではもっぱらアムハラ語が用いられる²。よってエチオピアにおけるリンガ・フランカとしての機能を持っており、事実上の公用語と言っても過言ではない。

2. 先行研究と問題の所在

アムハラ語はアフリカ諸語のなかでも記述は進んでいる方である。近代言語学的な考察をしたものにCohen(1936)があり、Leslauによる学習書(Leslau1967)や参照文法書(Leslau1995, 2000)などに正確な記述がみられる。また、辞書はГанкин(1969)やLeslau(1976)があるが、現在のところKane(1990)が最大最良であり、これは2巻本2300ページを超える大作である。しかしながら、どの辞書も語の訳語を提示するにとどまり、正確な意味記述や用法に関しては不十分であると言わざるを得ない。以下はKane(1990)中にある最も基本的であると思われる動詞nāggārāの項目である。

¹ yä-səra q*anq*a、直訳すれば「仕事の言葉」となる。公式英語訳ではworking languageと訳される。

² 国内のアムハラ語使用状況例については岩月(2013)を参照。

nāggärä

to say, tell, speak, relate; to inform; to proclaim, announce (herald, crier), to report (the word of the monarch) (obs.)

[Kane(1990):1060]

このように訳語の羅列がほとんどであり、意味用法の記述はほとんどない。そこで発表者は最も基本的であると思われる動詞語根*√ngr に焦点をあて、その各派生形の意味用法の記述を試みる。この記述研究は今後の学習者向け辞書や参照文法書の作成に寄与するだけでなく、意味用法の記述から動詞の他動性、モダリティなどといった研究の足掛かりともなる、極めて重要な課題であると考えられる。

3. アムハラ語の形態論

本節では、本発表に必要と思われるアムハラ語の形態論について述べる。ここで使用する音素表記は主に岩月 (2012) に従う。ただし、放出音の類はセム語学の強調音の表記慣習に従って /q/([tʰ]) のように表す。[k] に関しては /q/ と表記する。母音の音価については岩月 (2012) および Iwatsuki(2012) などを参照。

3.1 語根

アムハラ語は他のセム系言語と同様に、「語根」という概念を用いた独特の語形成過程が用いられる。「語根」とは、抽象的な概念を表すいくつかの子音群のことであり、通常 3 つの子音から成る³。例えば*√lbs は広く「着る」ことを意味し、この子音群に母音挿入、内部屈折、接辞付加などをして、様々な周位的意味を付け加える (lābbäsä「着る」、ləbs「衣服」、ləbas「本のカバー」などのごとく)。本発表で扱う*√ngr は広く「話すこと」を意味する 3 語根である。nāggärä「教える」、nəgəgər「スピーチ」など。詳細は本論にて考察する。

3.2 動詞の派生形

アムハラ語の動詞は語幹に内部屈折や接辞付加を施し、受動、再帰、自他交替、使役などのさまざまな周位的意味を付加する。形態とその意味関係は語彙的なものとして解釈したほうがよい場合が多いが、おおよその傾向は以下の通りである。

3.2.1 a-語幹

基本語幹に a- を付する a-語幹派生形は、主に自動詞の他動詞化の役割をする。

(1)	fälla	「沸く」
(1')	a-fälla	「沸かす」

また、使役的な意味を伴うこともある。a-による使役の意味は他の派生形においても重要であ

³ ただしアムハラ語では咽頭・声門摩擦音が弱化したことにより本来 3 つの子音であったものが 2 つの子音として扱われているものが多くある。

る。

- (2) bälla 「食べる」
 (2') a-bälla 「食べ物を与える、養う」

3.2.2 tā-語幹

基本語幹に tā-を付する派生形の主な役割は、受動や再帰、他動詞の自動詞化である。

- (3) säbbärä 「壊す」
 (3') tä-säbbärä 「壊れる、壊される」
 (4) mälläsä 「返す」
 (4') tä-mälläsä 「帰る」

また、活用型を C 型、つまり第 1 語根に付く母音を /a/ とすると（これを以降 ta+C 型語幹と称する）、相互、習慣といった意味を表す。

- (5) tä-nakkäsä 「嗜み癖がある」(>nakkäsä「嗜む」)
 (5') tä-saddäbä 「お互いに罵り合う」(>saddäbä「罵る」)

なお、この tā-を付する派生語幹では接頭辞を付する TAM において語幹頭に同化が起こり、第 1 語根が重子音となるので、未完了形や動名詞などでは形態上 tā-が現れない。

(6) əmmälläs-allähu (>*ə-tä-mälläs-allähu)

*return. T.IMP.1SG-AUX*⁴

「私は帰ってきます。」

3.2.3 as-語幹

基本語幹に as-を付する派生形は主に使役を表す。

- (7) fällägä 「欲する」
 (7') as-fällägä 「必要とさせる」(>欲させる)
 (8) ayyā 「見る」
 (8') as-ayyā 「見せる」

3.2.4 重複派生語幹(reduplicative)

第 2 語根を重複させてさらに母音を内部屈折する(第 2 語根重複前の母音を /a/ にする)ことによる「重複派生語幹」は主に動作の繰り返し、強意、繰り返すことによる動作の減退などを表す。

- (9) säbbärä 「壊す」
 (9') säbabbärä 「粉碎する、あちこちで破壊して周る」

3.2.5 *a(t)-語幹

この派生語幹は形態が非常に複雑である。実際に現れる形態は aQqATtāLa もしくは

⁴ 動詞の未完了形は単独では従属節中のみで用いられ、主節では助動詞的成分の allä が人称変化して伴う。なお本稿ではグロスにおける人称の表示は省略している。

aQQaTaTTaLä である⁵。この派生形はもともと上記の tā+C 型語幹に更に a-語幹を作る接辞を付加したもので、前者は a-tā+C 型語幹、後者は a-tā+C 型重複派生語幹と分析される形態である。この派生形の場合、接辞 tā-は必ず第1語根に同化されるので分かりにくいだが、第1語根の重化と後続母音が a であることが目印である。意味は主に「相互の動作」の使役である。

- (10) Kābbādā hulätt-u-n g^waddāññ-očč aggaddäl-aččāw.
 K two-DEF-ACC friend-PL kill.AT.PRF-OSP.3PL
 「ケッベデは友人2人を互いに殺しあわせた」

[Leslau(2000):101]

3.2.6 その他

アムハラ語にはその他にも astä-幹、tästä-幹などがあり極めて複雑な体系を成している。これらの派生形は本稿にて扱う範囲を超えているので、割愛する。ただし便宜上、例文において使用することはあるが、その場合には派生形とは扱わずに語彙的なものとしてグロスに付する。

4. 本論

発表者は2011年から2013年まで、3回エチオピアに渡航し、首都アジスアベバにおいて本主題に関する事項の聞き取り調査を実施した。インフォーマントは Mäkbəb Kassa 氏。アジスアベバに住む26歳の男性である。国内有数の名門校である Jimma 大学を卒業し、現在はアジスアベバにて医学の勉学に励んでいる。母語はアムハラ語で、第2言語は英語。家庭環境のためグラグ語（正確にどの方言かは不明）が少し出来る。出身の Jimma 大学はオロモ語圏内にあるが、授業は英語で行われ、友人らもアムハラ語が出来るため Mäkbəb 氏はオロモ語の知識はほとんどない。

調査には主にアムハラ語を用いたが、微妙なニュアンスの違いなどの説明などには適宜英語も使用した。

4.1 基本語幹 nāggärä の用法

Kane(1990)によると基本語幹の nāggärä の意味は次のとおりである。

to say, tell, speak, relate; to inform; to proclaim, announce (herald, crier), to report (the word of the monarch) (obs.)

[Kane(1990):1060]

特に「教える」「命令する」の意味で用いられることが多い。まず「教える」の用法から考察する。

⁵ セム語学の慣習に従い、第1語根、第2語根、第3語根を QTL と表記する。アラビア語においては「殺す」という意味であるが、アムハラ語では特に意味はない。

- (11) sälonon lä-tämari-wočč-u yä-ityoppya-n tarik yänägr-al.
S for-student-PL-DEF of-Ethiopia-ACC history BAS.IMP.3.SG-AUX
 「ソロモンは生徒たちにエチオピアの歴史を教える。」

動詞 yänägr-al は yastamr-al「教授する」にしても意味がほとんど同じであることからこれは「教える」といった意味で用いられていると言える。(11)では教える内容を対格目的語標示付きの名詞で示している。これを sölä「～について」という前置詞句とすることはできず、(12)のように動詞を tā+C 語幹にしなければならない。

- (12) sälonon lä-tämari-wočč-u sölä-ityoppya tarik yännaggär-al (*yänägr-al).
S for-student-PL-DEF about-Ethiopia history T+C.IMP.3.SG-AUX (BAS)
 「ソロモンは生徒たちにエチオピアの歴史を教える。」

ただし、非分離人称代名詞(Object Suffix Pronoun、以降 OSP と表示)を伴うと sölä-を伴う場合でも可能となる。

- (13) sälonon lä-tämari-wočč-u sölä-ityoppya tarik yänägr-aččäw-al.
S for-student-PL-DEF about-Ethiopia history BAS.IMP.3.SG-OSP.3.PL-AUX
 「ソロモンはエチオピアの歴史を生徒たちに教える。」

また次のような表現も可能である。

- (14) əssu mähedwa-n yänägr-änn-al.
he her.going-ACC BAS.IMP.3.SG-OSP.1.SG-AUX
 「彼は彼女が行くことを私に教えてくれる。」

- (15) bäl nəgär-änn.(*nəgär.)
well BAS.IMPR-OSP.1.SG
 「さあ、教えてよ。」

このように、「～を教える」という意味で用いられる naggärä は

- a) 内容を対格目的語でとることが多い
- b) 非分離人称代名詞を伴うことが多い

という特徴が見て取れる。ただし、例外として次のような例文が得られた。(16)では OSP も非分離人称代名詞も伴わないにも関わらず可能である。

- (16) zare astämari-w sölä-japan yänägr-al.
today teacher-DEF about-Japan BAS.IMP.3.SG-AUX
 「今日先生が日本について話してくれる。」

これを(12)と比較すると、「～に」という前置詞句がないという違いを除けば、構造は全く同じである。話し相手が想定されていない場合は次節にて述べる *tä+C* 派生形を用いることが多いが、この場合は基本語幹でも非文とはなっていない。なぜこの文が可能なのは今後の課題とするが、採取した例文の中でこのような構造を持つものは極めて少ない。

次に「命令する」の意味の *näggärä* の用法を見る。

- (17) *mäkbəb əndalačäs yənägr-äññ-al*
M that.I.don't.smoke BAS.IMP.3.SG-OSP.1.SG-AUX
 「メクビブは私にたばこを吸うなと言った」

(17)の動詞は *azzäzä* 「命令する」の意味であると確認したため⁶、このように使われた場合は命令の用法となる。命令の用法といえ、(18)の文は単なるアドバイスとして言う場合である。

- (18) *əssu əne əndämməmäṭa yənägr-äññ-al.*
he that.I.will.come BAS.IMP.3.SG-OSP.1.SG-AUX
 「彼は私に来るように言った。」

また、強く命令する場合は *tä+C* 語幹を用いる。詳しくは次節にて述べる。

4.2 *tä+C* 語幹 *tänaggärä* の用法

Kane(1990)による意味記述は以下の通りである。

to speak, speak to, tell, talk, converse, address(speech to a group), to make a remark

[Kane(1990):1061]

この派生形の第一の用法は「(言語を)話す」という意味である。

- (19) *amarəñña ənaggär-allähu*
Amharic T+C.IMP.1.SG-AUX
 「私はアムハラ語を話します。」

これは「出来る」という意味の *čalä* に置換可能であり(19')、言語を能力として話すことができるという解釈をすることができる。

⁶ しかし、置き換えが必ずしも可能という訳ではない。インフォーマントの *Mäkbəb* 氏によると、置換した場合は仕事上の会話であることが暗示されるという。(14)を *azzäzä* にした場合「(雇用者である)メクビブは(被雇用者である)私に(業務上差支えがあるから)タバコを吸うなと命令した」という意味になるようである。興味深い現象であるが、本論とは関係ないので詳細は割愛する。

(19') amarəñña əčəl-allāhu

Amharic be.able.to.1.SG-AUX

「私はアムハラ語ができます。」

言語名を伴って「(能力として) 話すことが出来る」という意味では、基本語幹ではなく、tä+C 語幹を用いる。しかし、「～と」という要素が加わると非文になる(20)。

(20)* shinya kā-mäkbəb gar amarəñña yənnaggär-al.

S with.M Amharic T+C.IMP.3.SG-AUX

「シニヤはメクビブとアムハラ語で話す。」

(20)では、たとえシニヤの能力の問題であっても「メクビブと」という要素があるために、不自然な文となる。いかなる文脈を想定しても「～と」がある場合は自然な文を作り出すことは出来なかった。(20)の意味を言いたい場合、動詞を tä+C ではなく tä+重複派生形にしなければならない⁷。

(21) shinya kā-mäkbəb gar amarəñña yənnäggär-al.

S with.M Amharic T+RDP.IMP.3.SG-AUX

「シニヤはメクビブとアムハラ語を話す。」

第二の用法は「～ということを知らせる、教える」という意味である。

(22) əssu əne əndämməməta yənnaggär-al.

he that.I.will.come T+C.IMP.3.SG-AUX

「彼は私が来るという事を知らせる。」

この意味では基本語幹 naggärä は使用できないが ((22'))、OSP を伴うと(23)のように前節の「命令する」の意味になる。

(22')* əssu əne əndämməməta yənāgr-al.

he that.I.will.come BAS.IMP.3.SG-AUX

「彼は私が来るという事を知らせる。」

(23) əssu əne əndämməməta yənāgr-āññ-al.

he that.I.will.come BAS.IMP.3.SG-OSP.1.SG-AUX

「彼は私に来るように言った。」

⁷ ただし、日常使う最も自然な言い方は awärra「会話をする」という別の動詞を用いた yawr-al という形であるという。しかし(20)のような文も非文とは言えず、正しいようである。

また、「教える」という意味では

(24) *əne sölä-jappan ənnaggär-allähu.*

I about-Japan T+C.IMP.1.SG-AUX

「私は日本について教える。」

も可能である。これは私=先生、相手=生徒を想定した文脈であり、先生が一方的にレクチャーをするという意味合いである。OSPを伴わなくとも「教える」の意味を表すことが出来、むしろOSPを伴うと不自然になる。

また、特殊な例ではあるが、次のような文も可能である。

(25) *šomagälle-w bəčča-w-n yənnaggär-al.*

elderly-DEF alone-DEF-ACC T+C.IMP.3SG-AUX

「その老人は一人でしゃべっている。」

この場合は「独り言を言っている」という意味であるが、この場合は相手が想定されていないので基本語幹では言う事ができず、*tä+C* 語幹を使わなければならない。また相手が一般大衆であるスピーチやニュースなどについても *tä+C* 語幹を使用する。

(26) *zare ETV sölä-japan yənnaggär-al.*

today ETV about-Japan T+C.IMP.3.SG-AUX

「今日、ETVで日本について話している。」

以上、*tä+C* 型派生形は話し相手が必ずしも想定されていないということが言える。「教える、話す」という意味ではOSPが取れないことから、この派生形における話し相手の存在は副次的なものである。これは接頭辞 *tä-*により再帰性をもつことに依ると考えられる。しかし4.1にて述べた「強い命令」の用法に関しては別である。

(27) *mäkbəb əndalaçäs yənnaggär-änn-al*

M that.I.don't.smoke T+C.IMP.3SG.-OSP.1.SG-AUX

「メクビブは私にたばこを吸うなと命令した。」

Mäkbəb氏によると、(17)のような言い方は *more offensive, giving an order, accusing* であるという。

また命令する対象に *lä-* という前置詞を使った場合も文脈によっては可能となる。

- (28) mäkbəb lä-ne bəčča əndalaçäs yənnaggär-änn-al
M for-me only that.I.don't smoke T+C.IMP.3SG.-OSP.1.SG.AUX
 「メクビブは私にばかりたばこを吸うなと命令する。」

ここで文脈上重要なのは「私にばかり」という部分である。これがなければ OSP で命令する対象の標示は十分であり、わざわざ前置詞句「私に」を付すると不自然になる。また、前置詞句のみで OSP なしの場合は非文となる(19)。

- (29)* mäkbəb lä-ne əndalaçäs yənnaggär-al
M for-me that.I.don't.somke T+C.IMP.3.SG-AUX

また、命令内容を伴わない場合は「間違いを咎める」の意味になる。この場合も OSP を伴わない場合は非文である。

- (30) mäkbəb bä-amarəñña tənaggärä-ññ.
M in-Amharic T+C.PRF.3.SG-OSP.1.SG
 「メクビブは私にアムハラ語で咎めた。」

なぜこの派生形が「強い命令」や「間違いを咎める」を表すことになるかはこれまでの調査結果からは明らかにならなかった。今後の課題とする。

4.3 tä+重複語幹 tənägaggärä の用法

Kane(1990)による意味記述は以下の通りである。

to talk, speak to one another, have a conversation (with), discuss, converse, have a word with,
 hold talks with, be on speaking terms with

[Kane(1990):1061]

この派生形は「会話をする」という意味で用いられる。

- (31) mäkbəb-əmma sälonon yənnägaggär-allu.
M-and S T+RDP.3.PL-AUX
 「メクビブとソロモンは話をしている。」

また上述(21)の「～と～語で話す」という場合もこの派生形を用いる。

- (32) shinya kä-mäkbəb gar bä-amarəñña yənnägaggär-al.
S with.M in.Amharic T+RDP.IMP.3.SG-AUX
 「シンヤはメクビブとアムハラ語で話す。」

この派生形は単数形でも用いる事ができるが、必ず参与者の複数性が関与していなければ使用することができない。しかし、下の例のような特殊な場合は適格性の判断が微妙になる。

- (33)? *šəmagəlle-w bəčča-w-ən yənnəgaggär-al.*
elderly-DEF alone-DEF-ACC T+RDP.IMP.3.SG-AUX
 「その老人は独りで話している。」

4.4 *a(t)-語幹 *annəggärä*, *annəgaggärä* の用法

Kane(1990)による意味記述は以下のとおりである。

annəggärä

to talk to s.o., to adress (s.o.); to cause or compel s.o. to speak; to have a proclamation made (obs.); to have s.o. ramble on.; to grant an audience

annəgaggärä

to talk to, converse (with), address; to hear a complaint, a case or suit (judge)

[Kane(1990):1061]

*a(t)-派生形は「話しかける」の意味で用いる。

- (34) *əssu bā-amarəñña annəggärä-ññ.*

he in-Amharic AT.PRF.3.SG-AUX

「彼は私にアムハラ語で話しかけてきた。」

この場合、語幹が重複形ではないため、相互のやり取りは含意されない。「彼」が一方向的に話しかけてきたという意味合いであり、「私」が必ずしも応対をするとは限らない。応対が含意されるためには語幹を重複させて *annəgaggärä* を用いなければならない。

- (35) *sälomon set-očč-u-n mannəgaggär yəwədd-al.*

S woman-PL-DEF-ACC AT+RDP.VN like.IMP.3.SG-AUX

「ソロモンは女性に話しかけるのが好きだ。」

また、Kane(1990)には記述がないが「会話をけしかける」といった、使役の意味で用いられる例も見られた。

- (36) *astāmari-w tāmari-wočč-u-n səlä-japan yannəgaggər-al.*

teacher-DEF student-PL-DEF-ACC about-Japan AT+RDP.IMP.3.SG-AUX

「先生は生徒たちに日本について議論させた。」

4.5 直接話法について

直接話法を閉じる動詞には *näggärä* のどの派生形も使用することが出来ず、別の動詞 *alä* 「言う」を用いなければならない。

- (37) *čaynawi selämmämäsəl säw-očč čayna yəl-aññ-allu.*
Chinese as.I.seem. man-PL China say.BAS.IMP.3.PL-OSP.1.SG-AUX
 「中国人に見えるので人々は私に『チャイナ』と言う。」

なお、アムハラ語に間接話法はないといわれている(Leslau2000)。

- (38) *mättähu alä*
I.will.come say.BAS.PRF.3.SG
 「すぐに帰ると彼は言った。」

5. まとめと今後の展望

以上本論にて動詞語根*√ngr のさまざまな派生形の意味と用法の記述を試みた。ここにもう一度まとめると以下の様になる。

- a) 基本語幹 *näggärä*
 「教える」(相手が想定されている場合)
 「弱い命令」
- b) *tä+C* 語幹 *tänaggärä*
 「(言語を) 話す」
 「教える」
 「強い命令」
- c) *tä+*重複語幹 *tänaggärä*
 「話す」(参与者の複数性が明らかな場合)
- d) **a(t)*-語幹 *annagärä, annaggärä*
 「話しかける」
 (重複派生をして)「会話をけしかける」

このように、*√ngr 動詞は第3章において述べたような意味の派生関係からは大きく離れているものがある。本研究ではさまざまな意味や用法を記述したが、先行研究にはない *tä+C* 語幹の「強い命令」の意味と**a(t)*+重複語幹で「会話をけしかける」という用法が得られたのは大きな成果である。また、各動詞形がどのような項をとるかという記述も今後の研究につながる

る大きな成果だと言える。今後は TAM での制限や人称などを考慮した、さらに詳しい記述を試みる。また、対象の動詞の幅を広げ、再帰性、他動性についても視野に入れデータの吟味をしていきたい。

なお、本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「変容するエチオピア諸言語の静態と動態に関する総合研究、ならびにデータベース構築」課題番号 22401026 (代表者: 柘植洋一 (金沢大学))、ならびに卓越した大学院拠点形成支援補助金 (名古屋大学、平成 25 年度) による国外旅費支援による研究成果の一部である。

またインフォーマントの Mäkbəb 氏の助けがなければ本研究は当然成り立たなかった。遠く日本から謝意を表す。

略号一覧

AUX (auxiliary)	助動詞
ACC (accusative)	対格目的語標示
BAS (basic)	基本語幹
IMP (imperfect)	未完了
OSP (object suffix pronoun)	非分離人称代名詞
RDP (reduplicative)	重複派生語幹
PL (plural)	複数
PRF (perfect)	完了
SG (singular)	単数
T	tä 派生語幹
T+C	tä+C 派生語幹
T+RDP	tä+重複派生語幹
VN (verbal noun)	動名詞

参考文献

- 岩月真也(2012) 「アムハラ語」、塩田勝彦編『アフリカ諸語文法要覧』、溪水社
- (2013) 「多言語国家エチオピアの言語事情に関する研究—共通語としてのアムハラ語と他言語との関わりについて—」『メタプティヒアカ』vol.7 名古屋大学文学部
- Э. Б. Ганкин (1969) *Амхарско-Русский Словарь*, Москва
- M. Cohen (1936) *Traité de langue amharique (Abyssinie)*, Institut d'ethnologie, Paris
- S. Iwatsuki (2012) 'An Acoustic Analysis of Amharic Vowels', *Studies in Ethiopian Languages vol.1*
- W. Leslau (1967) *Amharic Textbook*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- (1976) *Concise Amharic Dictionary*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- (1995) *Reference Grammar of Amharic*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden
- (2000) *Introductory Grammar of Amharic*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden

